

Back Number

本論文は

世界経済評論 2021 年 1/2 月号

(2021 年 1 月発行)

掲載の記事です



世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン販売

アメリカン・ドリームとは？



佐藤 紘彰

最近、New York Times 紙は American dream という表現を見出しに入れる記事を次々に出した。

まず、8月30日「Walking the American Dream」
と題する記事。ただ、これは印刷版の題で、ウェブ版では「Jackson Heights, Global Town Square」となっている。

かなり大型のこの記事が多くの写真とともに扱うのはウェブ版の見出しにあるジャクソン・ハイツ、ニューヨーク市を構成する5区の一つクイーンズにある。

合計 167 の言語

ジャクソン・ハイツはセントラル・パークの半分に相当するが、今から1世紀前にマンハッタンから白人を惹き付けるため作られた団地で、第二次大戦のあとラティーノが増えた。しかし、移民規制を大きく緩和した1965年移民法の後には多数の国々の人たちが流入、今や18万人に及ぶ住民が合計167の言語を話すという。

この記事の記者の道案内は Seketu Mehta ニューヨーク大学ジャーナリズム教授。メータ自身カルカッタ生まれの移民だが、この長い記事で American dream が出るのはただ一度、ジャクソン・ハイツでは移民証明書を持たなくても社会の底辺——文字通り「アパートの地下室」——から始めて、足場を築くことができるとメータが言った時、記者が、「それが正に American dream」と答える時だ。

次に、9月15日「American Dreams in a Corrosive Age」という見出しの記事が出た。これも印刷版とウェブ版とは見出しが異なり、後者では「With Wit and Anger, Ayad Akhtar Addresses What It Means to Be American」となって、American dream はなくなり、記事そのものにも出てこない。

記事は作家 Ayad Akhtar の第二小説『Homeland Elegies』の書評で、これは小説といっても自伝に近く、

そこに虚構（フィクション）をいくらか交えているようだ。アクターは両親がパキスタン出身の医師、父は著名な心臓専門医でトランプを診察したこともある。自身ニューヨークのステテン・アイランドで生まれたが、作品は9.11直後を含めアメリカ社会におけるムスリムの困難な立場を扱う。2013年の戯曲『Disgraced』ではそれを真正面から扱ってピューリッツァー賞を得た。

そうしたところから、NY Times の評者は『Homeland Elegies』を「アメリカとの愛憎関係」を描く「a very American novel」と呼ぶ。

1兆ドルの逆進税

それから10月4日出たオピニオン記事「The American Dream Is Tax Reform's Biggest Obstacle」がある。NY Times 紙は、トランプが公開を拒絶していた連邦納税申告の一連の暴露記事を9月末から出していたが、これによりトランプが長年慢性的な巨額の欠損とそれによる納税回避をしていたことなどが明らかになった。

だが、オピニオン記事によると、問題はトランプなど超富豪の不動産開発業者などに濫用を認める税控除より、むしろ上流中産階級（upper middleclass）の利用できる逆進税で、この税控除の額は2019年1兆ドルに達した（同年歳入3.5兆ドル）。現在300件に達するこうした税控除を廃絶しなければ連邦税制改正は望めない。

ところがこれら税控除の支持者こそ「American dreamの手本、すなわち大きな家屋」に住む中産階級、上流中産階級である。従って、見出しにいうとおり、「American dreamこそ税制改

正の最大の阻止物である」という。

アメリカ自画像の定番

さて、この American dream は、いつか Wall Street Journal 紙が「the staple of America's self-portrait」（アメリカ自画像の定番）と呼んだものだが、NY Times 紙のこの3例はいずれもこの夢が実現しているものとして扱っている。しかし、そうだろうか。この「定番」の意味を、例えば妻に尋ねると、「ボロ着から金持ちに（from rags to riches）」なることと答えるし、それは正しい。ところが、これを社会現象として様々の角度から分析する論考は、ここ何年もこの「夢」が実現しなくなっていると結論してきた。

事実、いま触れた WSJ 紙の「アメリカ自画像の定番」は、同紙が「Challenges to the American Dream」と題する一連の記事を連載した時に出てくる表現だし、この連載の出た年は NY Times 紙も「Class Matters」と題する一連の記事で、アメリカにも階級が現存するばかりか「上昇社会的流動性（upward social mobility）」（昔の言葉で言えば「出世」）が近年停顿してしまったと報告した。後者は後に一冊の本になった。

これら二つの連載が出た 2005 年、ぼくはこの問題を Japan Times 紙のコラムで「Is the American dream now a mirage?」と題して取り上げたが、ここ何年かの貧富の差の急激な高まりからすれば、この種の分析はますます増えていよう。

叙事詩

ところで、American dream というクリシェが「アメリカ自画像の定番」になった背景を改めて振り返って見ると、ことは James Truslow Adams (1878-1949 年) という人に戻る。

アダムズは、ウォールストリートの投資銀行家として十分な蓄えをつくってから歴史執筆に転じた、いわば学園外の歴史家だが、1921 年から 1924 年にかけて出したニューグランドの歴史 3 部作の

最初の一冊でピューリッター賞を受け、1931 年、一地方の歴史ではなくアメリカ全体の歴史を俯瞰する『The Epic of America』を出した。

アダムズはこの『叙事詩』を当初『The American Dream』と題していた。それは本の目的が「すべての階級の国民全部のために、よりよく、より豊かで、より幸福な人生を持つというアメリカの夢、即ち、世界の思考と福祉にわれらが成した最大の貢献」を敷衍することからだ。そして本でも American Dream を 30 回ほど使った。

しかし、出版社はこの題を一蹴した。普通のアメリカ人が「夢」などと題する本を買うはずがない。しかも予価 3~4 ドルだ。それは確かに当時の本の売価としては高かった。ぼくがたまたま雑誌記事で見た 1938 年出版の 700 ページの『The Rise of American Democracy』は定価が 1.72 ドル、『The Epic of America』を古本屋から取り寄せると、430 ページ、定価 3 ドルだった。

アメリカの欠陥

ところが、この『叙事詩』を読んで驚いた。エピローグでアメリカの欠陥を列挙していたのだ。いわく、「虹の下にある無限の富への争奪戦が残す醜い傷跡」、物質的には「自動車を駆る数百万国民の野蛮行為」、精神的には「国民一般がシニカルに無視する不法と汚職」、「ビジネスと金儲けと物質的改善そのものを良し」とし「美德」とし、「品質や精神的価値」よりも「物質的な大きさと数量」の方を重要とみなすようになった。

アメリカ人は「生計を立てる戦いの中で、生きるということがどういうことか」を忘れてしまった。その結果「無考えの楽観主義を不可欠」と考え、「いかなる場合でも見苦しい、浅ましい現実をみようと思わず」、「いかなる批判も障害物で危険」と自動的に見なすようになった、云々。

これは大恐慌が始まったころの観察だが、以来、事態は悪化したのか、どうか。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在 NY